

看護外来（仮）活動と今後の課題

Nursing outpatient department activity and future problem

がん化学療法看護認定看護師 宮下幸恵 緩和ケア認定看護師 内藤綾子
がん性疼痛看護認定看護師 伊藤紗弥香 越由香里 がん専門看護師 加藤咲子

〈要旨〉がん医療の場は外来の比重が高まってきており、それに伴って外来での看護の役割が重要と
なっている。がん告知を受ける患者・家族の意思決定を支える場においても外来に移行している
のは周知の通りである。がん患者とその家族が抱える全人的苦痛に対して、専門的な介入を図り、そ
の症状を緩和するために平成25年4月から看護外来（仮）活動を開始した。今後がん患者、家族が
治療や生き方について自ら選択できることをサポートし、QOLの維持・向上を支援していく必要がある。

キーワード：がん看護，看護外来，リソース

はじめに

がんは近年おおよそ二人に一人が診断される
ほど身近な病気である。治療環境の変化や在院
日数短縮化に伴い、入院治療から外来治療に移
行している。そのため、自宅でがんと共に生活
する患者が増え、QOLを維持したまま治療に取
り組み、自分らしい生活を送れるメリットをも
たらした。しかし一方で、従来であれば入院し
ながら医療者の援助を得て解決してきたさまざ
まな問題に患者が自らの力で対処しなければなら
ない事態が生じている現実もある。そして、
がん患者とその家族は、がん告知や再発の知ら
せに心がつかなくなったり、がん治療に関わる多
くの情報の中で混乱したままだったり、不安を
抱えたままでも増えている。この
ような状況において、患者・家族が療養の場が
変化しても不安を抱えこまないように、また治
療を継続させていくためのセルフケア獲得に向
けた支援を行うために、平成25年4月から看護
外来（仮）を開始した。今回、看護外来（仮）
活動内容と今後の課題について報告する。

倫理的配慮：個人情報取り扱いには充分配慮
し、外部に漏れないよう厳重に管理するととも
に個人が特定されないように配慮した。

目的

平成25年1月よりがん看護関連専門、認定看
護師が外来の現状を把握するために各外来フロ
アの見学を行った。外来見学の結果を踏まえ、

がん関連専門、認定看護師、看護副部長、外来
師長と今後の方向性について話し合いを行っ
た。専門、認定看護師が1日相談対応を受けら
れる体制をとった。活動内容として、①患者と
その家族が、がんと告知を受ける時から支援。
②自宅療養継続が可能となるようなセルフケア
獲得に向けた支援。③患者・家族が自宅での生
活において不安を抱えたままでないよう相談
支援。④上記の支援が切り目なく提供できるよ
う外来スタッフと連携体制を構築。⑤院内リソ
ースが活用されることを目指して人的ネットワ
ークを構築。活動内容について、外来スタッフ会
で提案しスタッフの了承を得て、A外来で活動
を開始した。

活動

平成25年4月から12月までで、看護外来の介
入を行った件数は87件であった。月曜日：がん
化学療法看護認定看護師、火曜日：がん性疼痛
看護認定看護師、水曜日：緩和ケア認定看護師
が活動を行った。患者の平均年齢は63.7歳だっ
た（図1）。

介入した診療科は消化器外科36%、呼吸器外
科45%が多かった（図2）。

介入元は、外来看護師からの介入依頼が多か
った（図3）。看護外来の流れは、外来看護師が初
診患者や医師より説明のある患者・家族や対応
が困難と予測される患者・家族について専門・
認定看護師に情報提供を行った。それを受けて
専門・認定看護師が患者・家族に介入を行った。

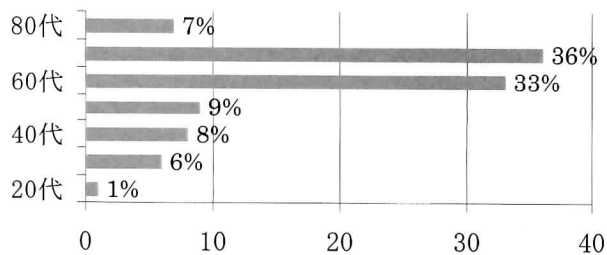


図1 患者の年齢

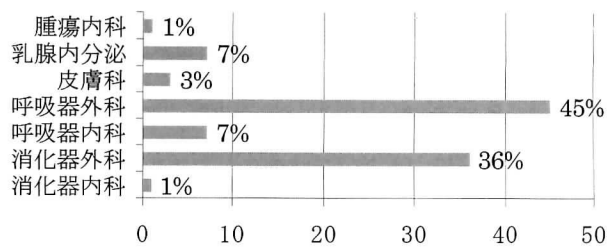


図2 介入した診療科

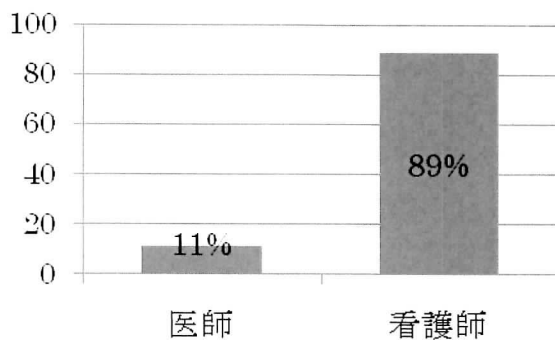


図3 依頼元

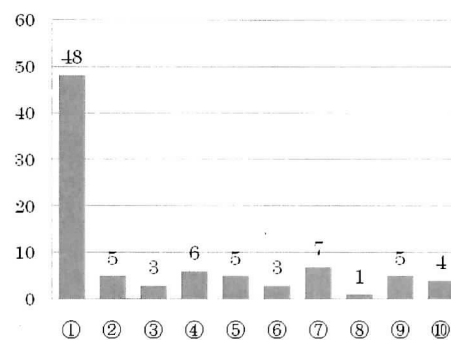


図4 介入内容と件数

介入した内容と件数は①病名告知に同席し治療への理解の確認は8件、②疾患治療に対する不安の患者の傾聴は5件、③緩和ケアについての相談は3件、④がんの再発および治療方針変更の説明の同席は6件、⑤疼痛コントロール不良に対するケア方法の相談は5件、⑥抗がん剤治療の副作用症状についての相談は3件、⑦検査結果、検査についての説明への同席は7件、⑧家族だけの病状説明、不安の傾聴は1件、⑨今後の療養先についての説明は5件、⑩その他は4件であった(図4)。

介入した中で多職種連携(緩和ケアチーム、入退院支援看護師、MSW)を行ったのは5件であった。患者・家族との介入所要時間は平均33分だった。介入した内容については、外来看護師に情報提供を行い、電子カルテに記録を残した。外来看護師と看護外来活動について2カ月に1回カンファレンスを行った。

今後の課題

- ①患者のニーズに応じた看護外来となっているのか、看護師のニーズになっていないかを見極めていく。また看護外来の介入を行った患者の思い、患者・家族の満足に繋がったのかを評価を行う。
- ②患者の介入を行うためには、医師との連携が

不可欠であるので、専門的な介入の必要性を見出し、医師へアピールしていく。また、医師だけではなく看護師にも専門・認定看護師の認知度がまだまだ低いため周知してもらえよう広報活動をしていく。

- ③看護外来が、がん患者とその家族の連続する治療期間をより専門的な立場でつなぐことができるように、外来看護師との連携、協働していく。外来看護師がコンサルトをするにはコンサルテーションの例をあげ、対象患者、対応について明確化していく。また困難な事例などは外来スタッフとカンファレンスにて事例検討を行い、フィードバックしていくことで外来看護の質の向上につなげていく。
- ④患者・家族の不安や困りごとなどはタイムリーな関わりが必要であるため、看護外来を行う環境(人材、時間、場所)の整備をしていく。
- ⑤専門・認定看護師自身がスキルアップを図るために、日々進歩しているがん治療の情報を得られるように自己研鑽していく。看護外来は専門・認定看護師の専門性を発揮できる場である。患者・家族に利用をしてもらうのを待つばかりではなく、自ら活動の場を探していくことも必要である。また、全人的ケアを行っていくためにリソースで連携協働していくことも検討していく。

結語

医師と連携をはかり、患者・家族の理解・修正・補足などを行い、患者・家族の満足度が上がること、患者のセルフケア能力を引き出すことで、

よりよきケアを行うことが課題である。患者・家族の意思を支えていけるような活動を継続していく。看護外来を周知してもらえよう自己研鑽を続けると共に啓発活動を行っていく。